1983.02.07　朝日新聞　夕刊　国際政治の中のキューバ

朝日新聞（夕刊）　第3種郵便物認可

文化

国際政治のなかのキューバ

若々しく革命に忠実
対米関係の改善も望む

中嶋　嶺雄

なかじま・みねお　一九一九年、松本市生まれ。一九六五年、東大大学院（国際関係論）修了。社会学博士。国際関係論・現代中国学専攻。著書には『北京烈士』（筑摩書房）をはじめ、『現代中国論』（青木書店）、『中ソ対立と現代』（中央公論社）などがあり、最新刊に『中ソ同盟の衝撃』（光文社）があり、サントリー学芸賞を受けた。

この冬休みに私はキューバを訪れた。新年早々からハーバード大学ジョン・K・フェアバンク東アジア研究センターで開かれた「ケンブリッジ中国史叢書」執筆者セミナーに出席する直前の短時日であったが、往路はメキシコ・シティーからキューバ航空のソ連製TU5機で、出路はハバナからフロリダ半島のマイアミへ真夜中に飛ぶ「合法的難民」用の米フロリダ航空チャーター機でというルートによって、貴重な見聞を積むことができた。

キューバ訪問の機会は、中国政治や中ソ関係を研究している者として、社会主義国の比較考察のためにも得がたいものであったが、私自身、かつてあのキューバ・ミサイル危機はもとより、キューバ革命や「七月二十六日運動」に関心を寄せた者として、以前からの懸案でもあった。

苛立ち大きい米国

それにしても、今日の「新しい冷戦」的な国際環境のなかで、外部世界とくに西側諸国におけるキューバのイメージは、決して良いものではない。ソ連の世界戦略に呼応したかたちでのアンゴラ、エチオピアなどアフリカ諸国への派兵、ニカラグア、エルサルバドル、グアテマラ、スリナムなど中南米諸国のキューバの印象を率直に語ってみよう。私は、キューバには三つの顔があると思う。

その一つは、いうまでもなく、カストロ指導下の革命国家としての顔である。この点でキューバは、まぎれもない社会主義国であり、教育や衛生に大いに力が注がれている半面、一般のキューバ人社会とはかけ離れたドル・ショップがあり、ホテルの周辺にはヤミ・ドル買いがうごめいている。

だが、キューバは、いまだ若々しい革命国家なのである。私が会ったトラス外務次官らのキューバ側要人との長時間の会見を通じても、キューバは、一時期の中国のように、まさに"ロマンチシズム（熱帯社会主義）"であるばかりか、情熱的で明けっぴろげなラテン・アメリカ民族であることには変わりがない。その点では私がこれまでに訪れた十指に及ぶ社会主義国のなかで、キューバの民衆の表情がもっとも明るかった。少女たちは向けられたカメラにはしゃいでポーズをつくり、少年たちはどこの街角でも野球に興じている。そして、星空の下、巨大な金属ヤシの木立をバックに浮ぜられる大野外キャバレー「トロピカーナ」のショーの熱気は、マンボやチャチャチャの強烈なリズムとともにまさに圧倒的であった。

だが三つには、キューバは、明らかに「南」の途上国であり、今日でももっぱら砂糖に依存している農業国であって、経済的には、まだまだきわめて厳しい状態にある。この点では、かつてカンボジアやベトナムで見た光景と二重映しの場面も多かった。

日本へ強い親近感

それだけに、アメリカによって経済的に封鎖されているキューバは、ソ連に頼らざるを得ないのであろうが、カストロ議長の同志たちは、キューバがインデペンデントであることを口をそろえて強調していた。そして、本当はアメリカとも関係を改善したいようであった。

キューバは社会主義国として、最近の中ソ和解の動きに多大の関心を示しており、この点での私の見方を熱心に求めていたが、それ以上に日本にたいしてはきわめて友好的な国である。聞けばカストロ議長の時計はセイコー、テレビはソニーとのことであった。それだけに、わが国としては、それこそ国際緊張の緩和のためにも、カストロ議長の訪日希望を受け入れ、日本を通じて世界を見直す機会を是非提供すべきではないかと私は痛感したのである。

（東京外語大教授・国際関係論）

文化

史の集

精彩放つモンゴル史

錯外錯

ガーザーン汗は、同族の国粋主義者の誰よりも、モンゴルのことを知っていた。『新元史』には、彼が蒙古の掌故、世系、族派、姓氏などに通暁していたことを述べ

――拉施特哀丁（ラシード）に命じて史を作らしむに、凡そ蒙古の事を述ぶるには、歯、面して教命を奉じ、而る後、筆に載す。

とある。当代随一の碩学（せきがく）であったラシードでも、ことモンゴルにかんするかぎり、ガーザーン汗からじきじき話をきかねばならなかった。

イル汗国が元朝を宗主国として認めていたことは前述したが、ガーザーン汗の時代になって、元への使節派遣が増え、ほとんど毎年のことであったといわれている。ガーザーン汗はけっして、イラン文化にかぶれて、モンゴルに背をむけたのではない。モンゴルを意識することが、同族の

とはいえ、知らないへ行った帰ってくるように大都いたであろ

即位前チン妃かいろいろい。元へたあたりの影をかには彼女ラシー暦七一〇れる。西